

カオハガン島の暮らし

今回、2月24日から29日の5泊6日、フィリピンのカオハガン島へ行った。カオハガン島で過ごし、水や電気、食べ物、自然、人との繋がりなど多くの大切なことに改めて気付かされた。また、文化や言語が違っても歌とダンス、絵は共通で一緒に楽しむことができ、笑顔と相手を理解したいという気持ちがあれば、コミュニケーションを図ることが出来ると学んだ。崎山さんもコミュニケーションは語学だけでなく、「相手の人達を受け入れ、笑顔で関わること。話す内容をしっかりと持っていること」の二つが重要だとおっしゃっていた。そして人間の幸せは人それぞれだが、お金をたくさん持っている、地位が高いといったことではないのだと思われる。周りに家族や友人など人がいて、朝昼晩の三食の食事、睡眠、排泄などして生活できていることが、幸せな生活なのではないか。崎山さんが「島の1家族の収入は1か月に9500円くらいで、世界の最貧国の収入である」と言うが、島民一人ひとり、とても幸せそうに笑い生活していた。幸せとは一体どういうことなのだろう。そう考えると人によって日本人は、「有名な企業に勤めたい」、「お金持ちになりたい」などと高望みし、そうした考えにとらわれすぎてしまっている人も多いのではないか。カオハガン島のゆっくりとした一日を過ごし、日本人は時間と膨大な情報に追われ惑わされて生活しているような気がした。

現在の日本は情報社会で、スマートフォン、テレビ、インターネットなどが身近にあり、誰もが気軽に情報を共有できる社会である。その中で「何もなく豊かな島」という、電子機器や情報がなくても島民が笑顔で幸せに暮らすカオハガン島。一体なぜなのか、またそのような島民、暮らしに興味・関心を持ち関わりたいと思い、今回の研修に参加した。そして、私の地元にも海があり田舎ではあるが、地域とのかかわりが強い町である。海が好き、島に行ってみたい、海外の文化や生活を身をもって感じ学びたい、島の高齢者と関わりたいといった目的が研修前にあった。

研修では崎山さんのカオハガン島滞在オリエンテーション、ビサヤ語練習、ココナッツオイル作り、小学校訪問、熱帯珊瑚礁、海洋生物保護について崎山さんからのお話、シュノーケリング、豚のとさつ、ホームステイなど、日本では経験できないようなことを多くさせていただいた。

3日目小学校訪問。一日の午前を小学3年生、午後4年生と分け、シートにクレヨンで絵を描くというのを子ども達と行った。テーマは「私の夢、宝物」である。午後、子ども達がシートに自分の夢を描いていく中で、テーブルから少し離れた場所に車いすに乗っている一人の女の子がいた。その女の子は絵を描かずその場にいた。崎山さんが2日目のオリエンテーション時に「障がいのある人は数人いる。しかし、基本的に普通に暮らす。車いすをみんなで押したりなど助け合っている。そのため、障がいを持っている本人もコン

プレックスを感じていない」とおっしゃっていた。また母屋にあった資料には「障がいをもっている人に対して特別視はしていない」と書かれてあった。その女の子に挨拶をすると、笑顔で返してくれた。シートが出来上がると、海へ持っていく皆で集合写真を撮って終わるという流れである。海までの移動時、女の子は友達に車いすを押され移動していた。しかし、海の砂浜に行く途中で車いすが止まり、押していた女の子が海に向かって行ってしまった。私ともう一人の学生は、車いすに乗っている女の子を海へ連れて行ってもいいのか、それともこの状態のまま私達だけ海に向かっていいのか戸惑ってしまった。その様子が分かったのか、女の子が「ここにいる」という感じの英語を言った。そのため、私たちはそのまま海へ向かった。しかし、私はあの時その女の子に対して、どのような対応が適切だったのか考えさせられる。小学校の先生に確認した上で椅子を持っていき、女の子を抱っこしていけば一緒に海へ行き、集合写真にもはいれたのではないか。同級生のみんながシートに絵を描いたり、海へ行く様子を見ていてその女の子はどう思っていたのか、「自分もやりたい」などと思っていなかったのか、などと考えてしまう。だがこうした私の考えは、その女の子に対して特別扱いということになり、本人がコンプレックスを感じることに繋がってしまうのだろうか。今回の場合、日本での対応を考えると何かしらの工夫をして、障がいのある子も同級生と同じ活動が行えるような対応が求められると思う。しかし、カオハガン島ではどのような対応がその女の子にとって求められていたのか、と今でも疑問ともやもやした思いがある。



5日目のホームステイだが、私は英語もビサヤ語も全くできない。その状態の中で、島

民の家庭に一人でホームステイをすることはとても不安であった。だが同時に、島民の生活を知れるため楽しみでもあった。どのようにコミュニケーションを図るのだろうかと思像もできなかった。しかし、ホームステイ先の方々は非常に親切で優しく、温かい家族であった。また研修前の「島の高齢者と関わりたい」という私の希望も後藤さんが叶えてくださり、島唯一の祖父、祖母が健在の家族がホームステイ先だった。その家族に限らず、カオハガン島は島民一人ひとりが思いやりにあふれ、老若男女問わず優しく笑顔が素敵な印象がある。ホームステイ先では、洗濯、調理、掃除、食器洗い、釣り、散歩、バスケ等で子ども達と遊んだりなど様々な体験をして過ごした。カオハガン島では洗濯や掃除、食器洗いなどは全て人間の手で行う。日本では洗濯機、掃除機、食器洗浄機などの機械が行ってくれる。実際に生まれて初めて手で洗濯を体験すると、いかに手で洗うと時間がかかるか、ベットカバーなどの大きな洗濯物を洗うことの大変さを実感した。食器洗いも桶の溜めた水で一度食器の汚れを落とし、次にスポンジで汚れを取り、順に桶に食器を戻し泡を落として最後に桶の水で綺麗にすすいでいく。日本では水を出しっぱなしの状態で食器をすすぐ。カオハガン島では桶に溜めた水で食器をすすぐので無駄な水を使用していない。しかし、桶に溜まっている水を繰り返し使用するので、食器用洗剤がきちんと落ちているのか衛生面に関して少し疑問に思う。そうした疑問はあるが、水道水を出したまま洗う日本の生活を振り返ると、日本人の水の無駄遣いや勿体なさを感じた。そして、実際に体験してカオハガン島で、水がいかに貴重で大切に使われているのかを理解した。自分自身、今までの生活において無駄が多いと気付かされ、日々の生活で意識し改善していかなければならない。

昼食時、家族全員で食卓を囲み食事した。カオハガン島での生活では母屋でも崎山さんをはじめ、後藤さん、先生、学生の全員で三食の食事をする。カオハガン島の食事はどれも美味しく、食事の時間が毎回楽しみだった。一つの食卓を囲み、同じ食事をとりながら会話することは、コミュニケーションの場となり食事のおいしさや楽しさを感じる。食事をみんなで食べるということは、人との関係を築くうえで大切な場と時間であることなのだと改めてわかった。日本では昔は家族全員で食事をとっていたが、食生活等が多様化し、孤食や個食などが増えている。カオハガン島を見習い、より食生活の改善への対策が求められる。

昼食を終えて島を子ども達と散歩した。カオハガン島の子ども達は活発的で非常に優しい。子ども達とバスケや、釣り、ボートで海に行き島を一周、カニ探し、輪ゴムで遊ぶなど様々な活動を行った。そこで思ったのは、子どもの発想性、創造性の豊かさである。輪ゴムを使い、あやとりやマジックを披露してもらった。初めてあやとりで、「バスケットゴール」を見た。それもゴールの中には、きちんとボールが入っているように作られており驚いた。釣り竿は、ペットボトルに釣り糸が巻かれたものを使用していた。輪ゴムや、ペットボトル、ビー玉、木の棒、砂など、子ども達にとっては身の回りにある物や自然が

遊ぶ道具となっている。おもちゃがなくても、自分で考え作ったり工夫し、色々な遊びを生み出してしまふ。また、子ども達は何事も積極的に挑戦し学習への意欲が高く、学ぶことに楽しさを感じているという印象を受ける。子どもの名前を紙に日本語で書くと、その子どもは真剣に自分の腕に同じように日本語で書いていた。何事にも興味や関心を持ち、楽しそうにしている子ども達の笑顔を見ると自分も嬉しく幸せな気持ちになった。

五泊六日、TVや携帯も見ずに過ごしたが、カオハガン島ではそれ以上に人と関わり自然の中での楽しい遊びが多く存在した。TVや携帯を使わなくても、自然があり人がいれば、楽しく充実した日々が送れるのである。「何もなく豊かな島」とあるが、何もないからこそ自分たちで作ったり直したり、人と助け合い生活していくので豊かな島なのではないのだろうか。島全体が一つの家族のようだった。そして海や木などの自然や資源に感謝して大切に暮らしていることも、何もなく豊かな島につながっているのだとわかった。ホームステイを通し、改めて日本の生活、自分の生活について振り返り見つめ直すきっかけとなった。初めて日本の外に出て生活することで日本の良い点、悪い点の両方が見えてくる。

カオハガン島に行き、人との繋がり、自然、様々なことに感謝することの大切さを学んだ。そして人は家族や友人、恋人など誰かが、自分のことを気にかけてくれば、その人の生活や人生は大きく変化するのではないかと思われる。日本では高齢化が進み、一人暮らしの高齢者が増加している。そうした中で地域と高齢者がつながるネットワークの重要性が問われる。私は大学4年間で福祉について学び、将来社会福祉士となり、社会福祉協議会か地域包括支援センターで働きたい。今回の学びを活かし研修で感じた、人が互いに支えあう関係性や人の温かさ、学ぶことへの向上心などを忘れず、日本で高齢者の方が孤独を感じず生活できるような取組みなどを行いたい。そのため、今後も自分の知識や技術の向上に努め、ボランティア等を積極的に行い、自分のできることを一つずつ行っていこうと思う。

五泊六日、人々や自然などを通して、より深く理解したカオハガン島の良さや魅力を自分の家族や友人など多くの人に伝えていきたい。研修を延長したいと思うほど、カオハガン島が好きになり、ぜひまた行きたいと強く思う。今回研修に参加するにあたり、崎山さん、後藤さん、ホームステイを受け入れて下さった家族の方、カオハガン島の島民の方々など、多くの人への感謝の気持ちを忘れず生活したい。また、引率の先生、一緒に研修に行った先生や学生の方にも感謝したい。この研修に参加できて本当によかった。有り難うございました。